

I 研究の概要

1 研究主題 「自分の思いを英語で発信できる児童の育成」

—「習う・慣れる・試す」の学習過程を通して—

2 主題設定の理由

本校は、平成 26 年度より中央区国際教育推進パイロット校の指定を受け、国際教育に関する先進的な研究・開発を行い、その成果を区内小学校に広めてきた。また、平成 28 年度より文部科学省教育課程特例校の指定を受け、これまでの英語活動を英語科・国際科とし、1・2年週2時間、3年以上週3時間を英語と国際の学習として時間を確保し、外部講師としてLCA国際小学校の教師、区英語講師と連携しながら英語学習を進めている。

昨年度は、1月に「第17回 全国小学校英語教育実践研究会 東京大会」の会場校として、これまでの本校の取り組みを発表した。本校の英語教育の取り組みを簡潔にまとめると、以下の2点が成果と言える。

一つ目は、英語指導のフレームワークの確立である。本校の英語指導には、帯時間で取り組むQuickTime、一単位時間の流れ、HRTの授業の最後に行うORTの読み聞かせなど特色ある指導法があり、それをTokwa English Handbookという冊子にまとめている。どの教員が指導しても、このフレームワークを用いて指導することで、学校全体の英語活動が高いレベルで維持されるような仕組みを確立することができたことが一つ目の成果と言える。

更に、本校に異動したばかりの教員には、年度当初に繰り返し指導法の研修を行うことや、年間を通して全6回の研修を通して、QuickTime、Small Talk、一単位時間の中で行う英語のactivityなど具体的な指導内容について日々の英語指導の指針となるような研修を繰り返すことで、どの教員も同じフレームワークの中で指導できる環境を整えた点は大きな成果である。

二つ目は、日常化の取り組みである。朝の会帰りの会、校内放送、係活動など、英語を話す場を日常的に様々な場面で設定し、学んだことを発話し、「試す」場をできるだけ多く設定した。日本人同士でも違和感なく英語で簡単なやりとりを行うことを児童に習慣付けられたことは、コミュニケーション力の向上に大いに役立った。

このような成果を踏まえ、本校が今年度、上記のような研究主題の下で研究主題を設定する理由は以下の二点である。

一つ目は、これまでの本校の英語教育の進化と発展である。本校が同研究主題の下で校内研究を進めて今年で三年目となる。しかし過去二年間は、コロナ禍による教育活動の制約を受け、それでもできることを模索しながら、研究を進めてきた。しかし、ねらいを達成するための「試す場」を十分設定することが難しかったことも事実である。そこで今年度も、昨年度同様の研究主題と仮説の下で研究を行うことで、研究主題と仮説の検証をより自由度の高い教育環境の下で進め、過去二年間で見えてきた成果を生かし、課題を解決していきたいと考える。

二つ目の理由は、個人差に配慮した指導を研究する必要性である。年度当初に行った英語に関する児童アンケートから、一部の児童に英語を苦手と感じたり、全体のレベルの高さから劣等感を感じたり、英語が嫌いと感じている児童がいることが分かった。

今年度の校内研究では、単元前半の「習う」「慣れる」場面で、ペアや少人数指導を存分に行い、児童の劣等感や苦手意識をいかに小さくし、その積み重ねの先にある「試す」場でいかに成功体験を身に付けさせることができるかについて、日々の実践と研究授業を通して検証する必要がある、このような研究主題を設定した。

3 研究仮説

目的を明確にして、日常生活と関連させた、必然性のある言語活動を行えば、児童は、場面や状況に応じた表現の仕方を考え、英語で発信するであろう。

目的を明確にする・・・単元末の「試す」場面にどのような活動があるかを児童がはっきりと分かる導入の活動を行うことが、単元を通した学習意欲につながる。

日常生活と関連させる・・・児童にとって身近なやりとりであることが、身に付いたことを生かす場を増やし、学習内容の定着に役立つ。

必然性のある言語活動・・・「伝えたい」という思いを児童が持ち、それを表現するための言語活動を繰り返すことが、自分の思いを発信できる力につながる。

単元の終末「試す」場面に、外部（企業・地域等）との交流や行事に関連した話し合い、異学年交流など具体的で必然性のある言語活動を設定する。それを単元の導入で児童が理解し、相手意識、目的意識を明確にして単元の学習を進める。その言語活動の内容が、児童にとって明確であり、身近であり、コミュニケーションを取りたいと思う必然性があれば、児童は単元を通して英語で発信することに意欲をもつと考える。相手とのコミュニケーションを円滑にし、更に広げるために、新出単語や表現を意欲的に身に付け、既習表現を生かしていこうという思いをもてると考える。

4 研究の組織と協議会

[授業研究分科会]

校長	—	副校長	—	研究推進委員会	—	【低学年部会】	1・2年担任、専科
						【中学年部会】	3・4年担任、専科
						【高学年部会】	5・6年担任、専科

研究分科会は、低、中、高学年分科会の3つとし、専科の教員は各分科会に1～2名ずつ配置した。

研究協議会の持ち方は、各分科会から1～2名ずつが参加した協議会用グループを作り、視点に基づいた成果と課題について話し合った。授業提案者のいる分科会メンバーから、指導の経過や提案の意図などについて、授業後にグループ内で質疑応答を行う。

また、協議会での情報交換には、Google Jambord アプリを用いる。協議会用グループごとに色分けし、視点ごとにページを分けることが容易なこのアプリの活用が、協議を効率化、活性化すると考える。

5 研究方法

- (1) 事前研究・研究授業…各学年1回、計6回
- (2) 講演会…年1回
- (3) 実技研…年4回

6 講師

玉川大学大学院名誉教授
昭和女子大学

佐藤久美子先生
グリーンバーグ陽子先生

7 研究日程

月日	研究推進委員会	研究授業	実技研修
4月	1日	研究主題の検討、 研究計画、係分担	研究全体会① 全国大会ふりかえり ハンドブック確認
	5日		実技研①(Quick Time、ORT)
	13日		研究全体会② 研究主題について
	26日	臨時指導案検討① (4年生①回目)	
5月	9日	指導案検討② (4年生②回目)	
	18日	授業研究①(4年生) 講師:佐藤久美子先生	
6月	3日	指導案検討③ (2年生①回目)	
	16日	臨時指導案検討④ (2年生②回目、 6年生①回目)	
	27日	指導案検討⑤ (6年生②回目)	
	29日	授業研究②(2年生) 講師:佐藤久美子先生	
7月	6日	授業研究③(6年生) 講師:グリーンバーグ陽子先生	
	21日		実技研②(1学期の振り返り)
9月	1日	研推	
	7日	研究全体会⑥ 講演会 講師:グリーンバーグ陽子先生	
10月	3日	指導案検討⑥ (5年生①回目)	
	26日	臨時指導案検討⑦ (5年生②回目)	実技研③(Activityの充実)
11月	2日	授業研究④(5年生) 講師:佐藤久美子先生	
	4日	研推	
	16日		実技研④(Activityの充実)
12月	2日	研推(紀要について)	
	9日	指導案検討⑧ (3年生①回目)	
1月	10日	指導案検討⑨ (3年生②回目、 1年生①回目)	
	18日	授業研究⑤(3年生) 講師:佐藤久美子先生	
	19日	臨時指導案検討⑩ (1年生②回目)	
2月	1日	授業研究⑥(1年生) 講師:佐藤久美子先生	
	3日	研推(成果と課題検討)	
	14日	研究集録〆切り	
	21日	研究集録管理職確認	
	28日	研推(全体会準備)	
3月	1日	研究全体会	
	下旬		紀要配布